

(1) 進化経済学を考える視点

1.1 経済学としての進化経済学、理論体系としての進化経済学

進化経済学 新しい経済学 (Veblen, Nelson-Winter)

既存の体系 新古典派経済学との関係をどう取るか

進化経済学は、経済学の一分野か、新古典派経済学に代わる基礎理論+展開か。

『進化経済学ハンドブック』編集会議 2年半

『基礎』「執筆グループは、既存の経済学にとって代わりうる体系として進化経済学を打ち立てることに本格的に取り組もうと決心した。」p.vi.

価格理論(新古典派の中核)を、新古典派に委ねてよいか

そうでないとしたら、新しい理論を用意すべきだ。

独立の経済学体系

- ①他の学問／経済学の中核となる部分を依存しない。
- ②拡張可能性 経済現象(と想定されるもの)は、原理的に(可能性として、潜在的に)視野に入っている。
- ③それらの問題を考える思考の枠組みを与えている。

1.2 教科書としての進化経済学

大学初年次生向け／3・4年生向け／大学院向け

『進化経済学基礎』大学初年次生向け／3・4年生向け？

『生産と市場の進化経済学』大学初年次生向け

大学初年次生向け

- ①(高校で政治経済を取っていなくても)予備知識なく読める。
- ②経済がどういうものが、あるていどの観念・イメージがつかめる。
- ③その観念が進化経済学の立場からみて、大きく間違っていない。

1.3 領域と分析手段

経済とはなにか

『生産と市場』生産と市場、進化(第9章)

『基礎』経済システム(社会的な仕組み)、ルールの束

研究対象

生産、市場、生活(消費者、働くこと)、企業

1.4 比較対象

『進化経済学ハンドブック』概説：目次

(2) 『基礎』 (進化経済学基礎)

2.1. 問題提起 巨大システム vs. 能力が限られている人間、繰り返せない時間 なぜ巨大システムがうまく機能するのか 第5章

別の視点 (vs. 新古典派) 生産-消費システム: ケネー、マルクスなどの再生産論
p.18 別の視点が、『基礎』の中で具体的に提示されていない。

2.2. 「制度」への過剰な期待

○索引 1.複製子 2.相互作用子 3.制度 (以上、3行以上)
2行のもの 外部ルール、進化、内部ルール、ミクロ・メゾ・マクロ・ループほ
か

○索引に欠けている項目 (教科書としては不備)

価格 市場価格 (資産価格、理論価格; 取得原価、時価: pp.47-50.)

技術 技術条件 (技術+技能) p.11 技術開発 p.51、技術 p.71、
動態的技術能力/静態的技術能力 p.214、技術革新/技術進化 pp.212-215

生産 生産の技術的条件 p.98

貨幣 6.2 「貨幣の生成と機能」

市場 6.3 「分散的市場」

消費、家計、企業

○制度の定義

「多くの人に共有されている複製子や複製子の束を制度とよぶ。」 p.7

「不可逆な時間の下で有限の能力しかもたない個々の主体は、そうした制度にしたが
って行動している。」 p.7

vs. 定型行動、プログラム行動

選択の対象 (社会的だけでなく、個人も)

不整合 「内なる制度」 (制度化された内部ルール)

<-> ミクロ主体が個別に持つ内部ルール 制度であるならば「共有されている」?

○ミクロ・メゾ・マクロ・ループの「メゾ」?

内なる制度 p.243.

「外なる制度」: 文化・慣習・規範・法、国家・貨幣・市場・会計

「内なる制度」: 価値・習慣・定型・成功・感情、認知枠組み・規範

メゾレベル: 「if-then ルール」の束である制度 p.175

<-> ミクロ主体の認知・行動 マクロ経済のパフォーマンス

第3.4節 「複製子と相互作用子によるバブルの形成・崩壊の説明」

「メゾ」を入れる必要はまったくない。

塩沢(1999) 「ミクロ・マクロ・ループ」、 「U-Mart の意義と展望」

○制度ならざるものへの目配りが弱い。

価格、技術、生産、市場、

交換 索引では、すべてポラニー関連のみ

「制度」といってしまったとたん、「内部ルール」「内なる制度」を含めて、
発見・改善・普及・廃棄・消滅といった機構/過程から視点が遠ざかっている。

○政策含意に関して

「経済の恒常性を維持するためにはいかなる制度設計が望ましいのか」 p.71
制度設計の前に、経済過程(変動、逸脱、恒常性維持)などの機構分析が必要。
その基礎のひとつは新古典派では価格理論。代わるものがなければ、分類学に。

○社会技術

マクロの社会工学?

現在のマクロ経済学 の「視野狭窄」に対するものとしてはよい。

しかし、「社会工学」、「全体的な認知・行動の仕方」を変える政策

「制度」とはことなる次元のものとして、「社会技術」という概念が必要では。

2.3. 巨大システムは、いかに機能しているか

- ・ 勘蝸團□N 巨大システム vs. 能力が限られている人間、繰り返せない時間
なぜ巨大システムがうまく機能するのか 第5章(第5章が他に生かされていない。)

巨大システムの機能を可能にする装置：第4.5「緩衝装置とゆるやかな結合系」

「if-then ルール」の feasibility を保証するもの

例：「在庫・貨幣・信用/複雑系の調整機構」(塩沢『秩序学』第10章)

例：在庫調整の全体過程 (塩沢：不安定、谷口・森岡：平均化で安定化する)

○市場経済(資本主義経済)

巨大な市場経済は、能力の限られている人間の手で、なぜ機能しているのか。

貨幣、売買の分離、価格(正常価格)、数量調整、再生産、資本蓄積、etc.

○貨幣はプラットフォーム・メディア?

「貨幣は、切り離しと情報のカプセル化という機能を通して分散型市場を形成するプラットフォーム・メディアである。」 p.165 でも具体的には?

「市場経済は、主体間が緩やかに相互連結される分散型システムであり、多対多の非線形な関係により構成される複雑系である。」 pp.166-7.

Cf. 「システム2元論の誤謬」

2.4. 個人行動の理論

○能力が限られている人間、繰り返せない時間 p.2-3. p.12

なぜ「if-then ルール」になるのか

それ以外のルールは、なぜ採用されないのか

「if-then ルール」はどのていど普遍的なものか

○限定合理的な人間は、いかなる行動をしているのか

p.164 現実の経済学では、満足原理に従う。(H.A.Simon、その環境条件は?)

選択(selection)の対象と機構

なにが変異するのか

どのような選択過程が働くのか

人間の判断による選択をどう組込むのか

○ミクロ・マクロ・ループ

(相互作用を)「進化経済学はボトムアップなアプローチで理解しようとしている」p.12
vs. 経済の総過程は経済行動のもっとも重要な環境条件である。それは、経済行動の
選択を通して、相互作用子・複製子の種類・頻度に作用する。

方法論的個人主義にならないためには？

2.5. 企業の理論

H.A.Simon 1979 Rational Decision Making in Business Organizations,
American Economic Review 69(4): 493-513.

H.A.Simon 1979 On Parsimonious Explanations of Production
Relations, Scandinavia Journal of Economics 81(4): 45+-474.

企業内の決定理論 vs. (新)古典的企業理論(費用関数、需要関数、生産関数)

スラッフア以降の企業理論(×J.Robinsonの不完・S競争論)

生産増強の制約条件: 販売費の増大、有効需要
費用論争 米国、西ドイツ

価格理論が欠如する原因にも

2.6. 分析手段

『基礎』は、経済を研究する分析手段として、なにを提案しているのか。
第5章「進化経済学のモデル」すくなくとも一つは、強い事例(strong case)が欲しい。

2.7. 結論

「進化経済学基礎」というより「制度経済学基礎」ではないか
それでは、新古典派経済学に代替する経済学になれないだろう。

(3) 『生産と市場』(生産と市場の進化経済学)

3.1 教科書として

「教科書的な部分もあるが、入門書ではない」p.ii-iii.
初年次生向けの教科書として、じゅうぶん成功している。

3.2 保留のための引用

引用 権威付け、話題設定の枕、クレジット(先行者からの「借り」を明示する)
谷口 態度保留のための引用・紹介？

5.5 IS 曲線、LM 曲線、国民所得の決定

「ぬ荷と彫りも分析のシナリオはとともよくできている。・・・確かに経済学を学んだ気になる。しかし、・・・議論がある。・・・批判もある。」p.88.

類似の引用・紹介 比例的成長>トラバース

3.3. より進んだ研究への示唆

乗数過程の発現 塩沢(1983)>>谷口(1991、1997)、森岡(2005) p.82.
数量調節においてひじょうに重要なところ

3.4. ソクラテスの知恵

第6章「市場の働きについて「知らないことがたくさんある」ことを知って、「知らない」ことがたくさんある」から、市場が存在するという意味の理解を目指す。」p.97

3.5. 市場 取引市場(よく組織された市場)

取引市場の成立条件 売り買いの注文が毎日いっていていどある。
これが、取引市場と相対市場との基本的な差異
生産物市場の価格の安定性議論にも必要なことでは

3.6. 第9章「道徳の起源と経済進化」

○行動ルールは、道徳的なものか

個人の選択という契機をどう捉えるか

行動をすべて生物次元で捉えてよい。(Witt, Dawkins) 人間は考える存在でもある。
定型行動の構造 qSS'q'

○Hayek だけでじゅうぶんか。

H.A.Simon の視点、分析

○普遍ダーウィニズム

生物進化論でも、総合説/ダーウィニズムについては、異論が(とくに日本で)多い。
進化経済学 ラマルク流進化(学習、ミーム) しかし、選択の裁量の余地がある。

(4) 全体として

4.1. 人間行動とその相互作用の総過程

○人間行動 Hayek か、H.A. Simon か

両立しないものではない。

Hayek 大きな構図ではよいが、細部が詰められていない。

イデオロギー運動としてはよくても、お題目では新古典派とは闘えない。

○行動進化・制度進化の前提>>定常過程

塩沢 1994 「人はなぜ習慣的に行動するのか」『複雑さの帰結』第2章

塩沢 1995 「慣行の束としての経済システム」『複雑さの帰結』第3章

塩沢 1998 「判断の論理とわれわれの知識」『比較経済体制研究』5:39-61.

定常性 塩沢 1989「定常過程の第1義性」『複雑さの帰結』第7章

「均衡」とどうちがうのか

価格の定常性 生産物市場と証券市場/派生商品市場

Hicks、森嶋 数量調節か価格調節か

古典派の価値論 国際価値論が古典派価値論の弱い環

Cf. 塩沢 2011「二大価値論の分岐点」

ケインズ理論が(北米で)なぜ流産したか。<<価値論がしっかりしていない。

○ミクロ・マクロ・ループの原型

乗数過程の微細構造、『ハンドブック』概説 6.3

①個別企業が今期の需要を基準に生産計画を立てる(塩沢)>>発散

②平均を取ると収束(谷口、森岡)>>収束

個別主体の行動(定型にしたがっていても、システムが安定するとはかぎらない)

個別主体の行動の進化(今期需要>>数期の平均、システムが安定化する)

ミクロ・マクロ・ループについて考える/論ずる人は、かならず参照してほしい。

4.2. 行動ルールの選択過程

『基礎』『生産と市場』ともに、新しい行動ルール(行動パターン/制度)が

①発生する機構 ②選択の機構/論理

に関する視点と方法が見えない。

4.3 方法論

科学方法論・認識論

『基礎』 方法論・科学哲学の議論は多い。しかし、「理論における闘争」(L.

Althusser)という概念を忘れていないか。この観点がなく、多数理論の並立だけでは、ブレーク・スルーも新しいパラダイムも生まれまい。

『基礎』第2章 補論「経済学の実在性の基礎はどこにあるのか」

コラム②「批判的実在論とは」

「入門」段階では、隠し味にすべし。方法論的議論は、別の一冊を編集すべきでは。

[参考文献]

進化経済学会編 2006『進化経済学ハンドブック』共立出版

概説・目次

1 経済における進化

1.1 生物の増殖と進化

1.2 商品の進化

- 1.3 進化概念の拡張
- 1.4 経済において進化はなぜ普遍的か
- 1.5 進化経済学の概念

- 2 進化するものの諸カテゴリー
 - 2.1 商品
 - 2.2 技術
 - 2.3 行動
 - 2.4 制度
 - 2.5 組織
 - 2.6 システム
 - 2.7 知識

- 3 進化の総過程
 - 3.1 変異の機構
 - 3.2 選択の場
 - 3.3 競争と進化
 - 3.4 ミクロ・マクロ・ループ
 - 3.5 進化に開かれた経済
 - 3.6 経済発展
 - 3.7 経済史

- 4 市場経済の諸原理
 - 4.1 基礎とすべき枠組み
 - 4.2 相対取引
 - 4.3 交換の原理
 - 4.4 裁定と交換比率
 - 4.5 貨幣と価格
 - 4.6 売りと買いの非対称性
 - 4.7 収穫逦増
 - 4.8 切り離し機構
 - 4.9 決定の向きと流れ
 - 4.10 重層的決定

- 5 分析の枠組み
 - 5.1 過程分析
 - 5.2 進化ゲームと個体群動学
 - 5.3 コンピュータ・シミュレーション
 - 5.4 統計的分析
 - 5.5 歴史研究と実証研究
 - 5.6 経済学の歴史

- 6 現代的経済の分析例
 - 6.1 企業の生産量決定
 - 6.2 収穫逦増下の企業規模
 - 6.3 経済全体における生産量決定
 - 6.4 価格・数量の決定態様

- 6.5 価格設定と上乗せ率
- 6.6 販売量と利潤
- 6.7 販売努力とベンチマーク
- 6.8 金融市場のシミュレーション
- 6.9 薄い板の市場
- 6.11 国際貿易と所得水準
- 6.12 経済の累積的發展

- 7 新古典派経済学のドグマとアノマリー
- 7.1 均衡のドグマ
- 7.2 価格を変数とする関数のドグマ
- 7.3 売りたいだけ売れるというドグマ
- 7.4 最適化行動のドグマ
- 7.5 収穫逓減のドグマ
- 7.6 卵からの構成のドグマ
- 7.7 数学への盲目の信仰
- 7.8 方法的個人主義のドグマ

- 8 進化経済学の可能性
- 8.1 パラダイムの転換問題
- 8.2 転換は可能か
- 8.3 進化経済学の未来

塩沢由典 1997『複雑さの帰結』NTT 出版

プロローグ 複雑さの学としての経済学

第Ⅰ部 複雑系の行動学

- 1 複雑さの帰結
- 2 ひととはなぜ習慣的に行動するのか
- 3 慣行の束としての経済システム

第Ⅱ部 複雑系のシステム論

- 4 ゆらぎ・あそび・ゆとり
- 5 組織における世界像分業
- 6 システム2元論の誤謬

第Ⅲ部 経済学の再生のために

- 7 定常性の第一義性／一般均衡理論に抗する一試論

塩沢由典 2008「社会科学と社会技術」石黒武彦『科学と人文系文化のクロスロード』

萌書房、第7章、pp.161-185.

- 1. はじめに
- 2. 社会技術とはなにか
- 3. 補論 人文技術
- 4. 社会技術開発の現路線とその問題点
- 5. 社会技術の開発と社会科学

塩沢由典 「判断の論理とわれわれの知識／事前選択 vs. 検証された規則」 『比較経済体制研究』 第 5 号、pp.39-61.

まとめ

1. 選択という判断形式
2. 選択理論の基本形 (確実な場合の選択/不確実な場合の選択/ベイジアン思想の影響)
3. 選択理論に欠落するもの
4. 意思決定の諸相
5. 賞金額と判断費用
6. 決定と選択の違い
7. 決定を支えるわれわれの知識
8. 実績に基づく評価
9. 系列的な決定過程
10. 決定を下すに十分な判断
11. 結論